

## 二十一世紀への視線

——文化の相互理解について——

（一九九〇年度始業講演 現代文化学部）

森 本 哲 郎

今年入った一年生の皆さんが、この大学を卒業するのは一九九五年ですね。社会に出て五年後に、二十一世紀を迎えるわけです。この新しい世紀を担うのはあなたがたであり、その責任はたいへん重いといわなければなりません。なぜなら、私たちの前には、地球的な規模で難問が山積しているからです。

では、そのために、どのような心構えが必要なのでしょう。私が何よりも強調したいのは、はっきりとした目的意識を身につけよ、ということです。むろん、人間は誰でも目的意識を持っています。しかし、重要なのは、その目的をめざす視線ということです。残念ながら、これまでの日本人の視線は、きわめて短かったといわねばなりません。つまり、ほんの間近な目標だけに目を奪われて、大局を展望する余裕が、ほとんどなかったということです。国際化が要求される現代の日本人にとって、まず、身につけなければならないのは、時間的にも、空間的にも、長い視野を持つことだと私は思います。

さて、皆さんは大学生になったわけですが、大学というところは、中学や高校とまったく違う勉強の場です。どこ

が違うのか。大学は教えられるところというよりも、自発的に学ぶところなんですね。自発的に学ぶ、ということは、自分で疑問を抱き、その疑問に自分で答えようという努力を意味します。それが学問なのです。「学問」とは、文字通り、「問いを学ぶ」ことにほかなりません。中国の荀子は言いました。「問いの悪い者には答えるな」。つまり、どのように問うか、ということが、何より大事なのです。大学は「問いを学ぶ」場といってもいいでしょう。

世紀末の今日、世界の歴史は劇的に変化しつつあります。この激変の後にどのような人間世界が出現するか、予想することは困難です。しかし、いずれにせよ、新しい世界のパラダイムがつくり出されねばなりません。その枠組みを構築するのが、あなたたちなのです。そのためには、なんといっても、歴史的な意識を持たねばならないでしょう。おそらく、昨年の東欧をはじめとする世界情勢の変化は、みなさんにあらためて歴史的な興奮を与えたことと思います。自分たちは、いま、こうして世界史の中で生きている、という実感です。そのような実感を、このうえない教科書として学ぶことのできるみなさんは、ある意味では、学生としてたいへん貴重な第一歩を踏み出した、といえましょう。

このような歴史的な環境の中で学ぶわけなのですから、あなたがたは先にお話したように、何のために勉強するのか、何を探究するのか、その成果をどのように生かしたらいいか、という目的意識を、めいめいに、はっきりと持っていたいただきたいのです。ちかごろでは、大学は、ただ資格を取得するためのものになってしまったと言われます。別に、大学生諸君も、単位を取って卒業できればいい、そして一流企業に就職できればいい、と、そう思っているようです。しかし、そんな安易な考えでは、いまや世界に大きな影響力を持つようになった日本の将来を担っていくことはできません。

あなたがたの目の前には、無数の深刻な問題が横たわっています。地球的な規模で広がりつつある環境汚染、爆発する人口問題、国際政治の劇的転換、いよいよ大きくなっていく南北の格差、各地に頻発する民族問題……、世界はかつてなかったほどの困難な状況にあります。こうした問題がすべて二十一世紀に受け継がれようとしているのです。大学はこれらとけっして無縁ではありません。昔のように「象牙の塔」などといって超然としてはいられないのです。とうぜん大学そのものも、これまでのような性格から脱皮していかなければなりません。本学に「現代文化学部」という新しい学部が設けられたのも、時代の要求に応えたものです。

しかし、時代が要求する新しい大学、新しい学問をつくり出すことは、けっして容易なことではありません。一方でひろい範囲の知識が求められ、他方ではきわめて専門的な研究が必要とされるからです。抽象的というならば、それは、普遍化と特殊化を同時に進めていくことにほかならない。これについても、必要なのは、広い視野ということでしょう。広い視野の上に立たなければ、両極を統合することは不可能だからです。

こうした目で世界を再び見渡してみましょう。世界の各地域は一九九二年をめどとしたE.Cの共通市場に見られるように、統合への道を歩んでいます。ところが、そのように統合が進めば進むほど、各国はそれぞれのアイデンティティーを意識するようになり、個性化が同時に進行することになります。先にお話した学問の場合と同じように、世界そのものが、普遍化と特殊化という相反する方向に動こうとしているわけです。そこで、民族間の紛争が、さまざまな形で噴出することになります。これから求められるのは、そうした民族間のトラブルをどのように解決するか、という知恵といていいかもしれません。

現在、日米、日欧をはじめとして、各国間にいろいろな経済摩擦が生じています。とくに経済大国となった日本が

直面しているのが、こうした摩擦をどうして解決するかという問題であることは、みなさんもよく知っているでしょう。しかし、日米構造会議をみてもわかるように、経済摩擦というのは、結局は文化摩擦なのです。お互いの文化理解が未熟であるために、さまざまな誤解が生じ、軋轢が深まっていく有様です。だとすれば、これからの日本にとっての、いや、世界にとっての課題は、異質な文化の相互理解にある、ということは言うまでもないでしょう。

みなさんは「現代文化学部」を志望して、本学で学ぶことになりました。みなさんの研究課題は、とうぜん、文化とは何か、異なった文化をどのように理解するか、ということに尽きるでしょう。そこで、その文化理解の鍵として、世界をどう見るべきか、をカメラを参考にしながらお話しておきましょう。

それは、広角レンズの視点と望遠レンズの視点を持つことです。私は世界のあちこちを旅することにカメラを携えていきますが、標準のレンズだけでは、けっしていい写真が撮れません。被写体を正確に写し取ろうと思うなら、どうしても、ふたつのレンズが必要なのです。細部をクローズ・アップするには望遠レンズがいりますし、背景を含めてとらえようとするなら、広角レンズに頼らざるをえません。この両レンズによって、初めてさまざまな風景、人物などをはっきりフィルムに収めることができるのです。

世界、そして、歴史を見る目も同様です。あなたがたは本学で、このような世界の見方を学び、文化の本質を理解するよう努めてください。そして素晴らしい二十一世紀をつくりあげる、そのような意気込みで、これからの四年間を有効に過ごすよう、私は心から願っています。